

世界で活躍する人材 ロータリー平和センター

国際基督教大学（ICU）にはロータリー平和センターがあります。センターではどんな活動をしているかを紹介しつつ、本学にとって、このロータリー平和センター設置指定大学になっているということが、男女を問わず、世界で活躍する人材を育てていく上でいかに意味があるのか、ということをお話ししたいと思います。

国際基督教大学前学長 日比谷潤子
Junko Hibiya

ICUとロータリー

現代は、まだまだ女性の活躍が少ない世界です。今後さらに、社会のあらゆる場面での女性の進出が肝要となります。2019年、東京大学入学式で、上野千鶴子東大名誉教授が述べられた祝辞が大変話題になりました。祝辞内容は多岐にわたるものでしたが、一番のメッセージは最後の部分にあったと思います。

それは「これまで皆さんはとつても恵まれてきたけれども、頑張らなくても頑張れない人もたくさんいるのだから、その恵まれた環境で育ってきて得た力を、ぜひ人々のために使ってください」というところです。そこがメインメッセージだったと私は思いましたが、祝辞の最初では、東京大学入学者の女性比率に触られました。

この会場に東大出身の方もいらっしゃるかもしれませんが、東大には「2割の壁」という言葉があります。これは、女子学生の比率がなかなか2割を超えない、という意味です。現代でも実に少ない。歴代総長には女性はいない、というお話もありました。確かにその通りです。

上野さんは、少ない女子学生が置かれている

現状についてもお話しになりました。2014年ノーベル平和賞受賞者のマララ・ユスフザイ（1997）さんの、お父さんの言葉を紹介されました。「『どうやって娘を育てたか』と訊かれて、『娘の翼を折らないようにしてきた』と答えました。その通り、多くの娘たちは、子どもなら誰でも持っている翼を折られてきたのです。入学式祝辞からそのまま、引用しております。

この部分が、私が素晴らしいと思ったところです。それはなぜかと言いますと、わがICUのロゴには「Expanding Potential」と入っているのです。ロゴとしては英語ですが、日本語を決めたのは今から3年ぐらいい前。実は日本語の方が先でありまして、「可能性の翼を広げよう」という標語をつくったのです。もちろん、マララさんのお父さんの言葉「娘の翼」を耳にするより前のことで、偶然の一致なのですが、このロゴに決めてよかった、と本当に思いました。

もちろん、女の子が翼を折られないようにしなければいけないというのは、非常に重要なことです。しかし、上野さんの祝辞メッセージのように、翼を折られているのは女性だけではなく、いろいろな国の、いろいろな境遇の中で残念ながら翼を折られてしまった人、どうしても疲れてしまつてこれ以上飛べない、という人はたくさんいるわけです。

私は、ロータリーのこれまでの長い活動は、この翼の比喩と同じではないか、と思つています。人々が本来持つていける翼をどうしたら、もっと大きく羽ばたかせることができるか。ポリオ根絶やロータリー平和センターの活動などは、翼を折らないために進めてきたロータリーの活動、この組



2019年のロータリー平和センター年次セミナーで 国際基督教大学提供

織の在り方なのだと思っております。

そこで、ICUです。2018年の東大の女子学生比率と女性教員比率は約18%。ICUの女子学生比率は50%は超え、全体のほぼ3分の1の教員が女性教員。比較的ジェンダーバランスの良い大学と言ってよいかと思います。その大学に、ロータリー平和センターがあるわけです。

ロータリー平和センターは1996年、ロータリーの創始者ポール・ハリス没後50周年を記念して始まった構想、と聞いております。ロータリー財団として、国際問題研究のためのセンターを世界各地につくりましょう、ということがまず決定され、開設に関心を示す大学を具体的に検討、訪問されたとのことです。3年後の99年に、八つの提携大学が選ばれた中で、ICUはアジアで唯一、修士課程を持つセンターとして選定をしていただきました。提携大学の数は今は七つですが、今後も現状に即して変化していくでしょう。

センターの正式名称は「平和および紛争解決の分野における国際問題研究のためのロータリー平和センター」。長いので通称「ロータリー平和センター」と呼んでおります。2002年、当学に設置され、第1期生のフェローの受け入れを開始しました。

ICUでは毎年、4月と9月に2回入学式を行います。「ロータリー平和フェロー」は9月に入学します。ただ、私はこの02年に赴任しましたので、大変率直に申しまして「ロータリー平和センターって何？」という感じでした。でも、08年以降は毎年6月の平和フェローの発表会にも必ず出席するほどになり、平和センターの歩みと私のICU生活というのは完全に一致、特に親しみ

を持って、いつもその活動を見てまいりました。

もう一つ、ご存じの方も少なくなってきたかもしれませんが、この平和センター設置以前から、ICUとロータリーは非常に深い関係がありました。当学初代の理事長は東ヶ崎潔氏。日本人初の国際ロータリー(RI)会長(1968-69年度)です。ICUのような国際協力によってつくれる大学、そして戦前からの願いだっただけですが、宗派を超えたキリスト教大学を日本につくらう、と決めたのが1949年なので、2019年でちょうど70年になります。

平和フェローが学ぶこと 平和フェローから得ること

さて、平和センターですが、今、アメリカにはデューク大学とノースカロライナ大学にあります。それから、ヨーロッパではイギリスのブラッドフォード大学、スウェーデンのウプサラ大学、そしてオーストラリアのクイーンズランド大学。2021年1月からはウガンダのマケレレ大学がスタート予定で、日本がICU。アジアにはもう一つ、タイのチュラロンコン大学に修了証を出すプログラムがあるのですが、ここでは修士号は取れません。

ICUでは2年間大学院に在学し、平和研究の修士号を取るプログラムになっています。当学は02年の1期生以来、アジアで唯一の、修士号取得プログラムを設定しています。この18年間で、160人の学生を受け入れています。一年に約10人の受け入れですね。

平和センター設置校に対しては、数年に1度、

RI本部による調査がありますが、なかなか厳しい査定です。例えば、授業の見学、学長たちとの面談、施設の整備状況、何よりも、ロータリー平和フェローとのさまざまなインタビューなどを経て、「あんまりうまくいってないな」という評価を受けますと、看板を下ろさなければいけないのです。現実には、選定を外された大学もありますし、逆に新たに加わったところもあります。その中で18年間、センターを継続できたことは、本当に幸いだったと思っています。

平和フェローのプログラムでは、その人たちだけが何か別のグループをつくって勉強している、というわけではありません。日本人の大学生、他のプログラムで来る留学生とも一緒に、修士課程で学んでいます。そして2年間で修士論文を書き、「修士(平和研究)」という学位を取得します。

平和フェローの出身国ですが、実に世界のさまざまなところから来ています。そうでなくてもICUにいらした方は、キャンパスに留学生が多いという印象を持たれると思います。北米とオーストラリア、ニュージーランドを含むアジア、太平洋地域からの学生が多いです。それに次いでヨーロッパ、そしてアフリカと中南米がほぼ同数。伝統的に、北米からの留学生が多かったのですが、最近ではアジアからの学生を、力を入れて増やしています。韓国、中国、台湾、香港、タイ、カンボジア、ネパールなども最近増えています。

しかし、ロータリーのようなプログラムがなければ、今ほど多様なところから、修士課程の学生として入ってくる人は、なかなか少ないものなのです。これだけいろいろな国から来ることは、他ではほぼあり得ないと思いますので、たとえば1人

ずつであったとしても、ロータリーのプログラムによって、ICUの国際性というのは非常に豊かになっていることにも、いつも感謝しています。

世界で活躍する人材を 育てるために

平和フェローは2年間、具体的に何をしているかと言いますと、基本1年目は大学院の授業があり、毎年3月、つまり入学して約半年後に、広島に研修旅行に行きます。このプログラムでは、広島のロータリアンの方々にも大変お世話になっていきます。広島にある機関を幾つも訪問し、被爆者の方々にインタビューをして体験を伺います。これはICU独自の取り組みであり、世界の平和センターの中でも、非常に特徴的なものだと思います。毎年、平和フェローには非常に強いインパクトを与える活動となっています。

ピースセミナーもあります。これは国内外から講師をお招きし、公開セミナーを開催するものです。6月にはピースウィークもあります。19年に、平和フェローの主導、学生からの自発的な取り組みで始まりました。当学には伝統的にキリスト教週間があり、比較的最近できたものに環境週間と言います。環境問題を考えようという1週間があります。それらに続き、第三の週間としてピースウィークを設定されました。どんな活動でもいいのです。「平和」を考え、映画を見ることも構いません。行動を通して平和を考えるイベントを行っています。

それから、このロータリーのプログラムの最大の特徴と言ってもよい、と思いますけれども、必

SPEECH

世界で活躍する人材
ロータリー平和センター

ずインターンシップがあります。1年生と2年生の間の夏、ですから7月、8月あたりになります。世界中の全平和センター必修のプログラムです。国際機関、例えば政府関係の機関とか、いろいろなNGOなどでインターンシップを行うわけです。例えば、フィリピン大学で建築学を学んだ後、建築家として働いていた平和フェローは、ユネスコでインターンをしたそうです。

このインターンシップ中にフィールドワークを行ってききますので、2学年目にまとめる修士論文は、その時のフィールドワークで集めてきたデータなどが基になることが多くなっています。毎年6月には、ロータリアンの皆さまにもご臨席賜っています。修士論文提出を終えた2年生により、発表会が行われます。その場所が、先ほど触れました故・東ヶ崎理事の名前を冠した「東ヶ崎潔記念ダイアログハウス」の国際会議場です。

研究内容や地域交流などについて、あるいは、国内外で自分たちがどんなところを視察したかなど、平和フェローは定期的にブログで発信もしています。他にもフェイスブックやツイッターなど、SNS（会員制交流サイト）を活用していますので、かなり多くの方がフォローしてくださっています。ウェブ版ニュースレターもあり、編集から完成まで全部、平和フェローが自分たちで行っています。

それでは、研究テーマとして幾つか代表的なものを挙げてみましょう。

東日本大震災に遭遇した9期（2010-12年度）生のマーク・フラナガンは、「3・11後の世界における日本、人間の安全保障と災害」というテーマで修士論文を書きました。修了後しばらくの間、ニューヨークにあるICUの財団で働いていたので、スタッフとしての付き合いもできました。3・11の後、ロータリー平和フェローの有志は、ボランティアで被災地に行き、随分長い間活動していましたが、そういった体験も、この修士論文につながったと理解しています。

10期生のアリソン・クエッセルは写真家です。この人も「複雑な災害への対処の在り方」として、福島をフィールドにした修士論文を書き、そのまま博士課程に進学しました。写真集も出しているのですが、ご覧になった方があるかと思います。同じ10期生のテイラー・ステイブンソンは「ごみ箱の変容」が修士論文。ブータンでのフィールドトリップを生かして書いています。

11期生のマイケル・アンジェラは、ユネスコの世界遺産決定の倫理的ガイドラインについて、執筆しました。ユネスコの世界遺産の決定については問題になることが多いですね。

修士論文執筆後は、NGOに行く人が41%、政府関係の機関で働く人が12%、大学の教員など教

育に携わる人が10%。あとは国連難民高等弁務官事務所や国連人口基金といった国際機関、弁護士、メディアといったようなところが就職先でしょうか。5%ほどは博士課程に進学します。

改めて平和フェローを見てみると、女性が活躍していることを実感します。先に述べたように、マラさんのお父さんのような教育も大事ですが、やはりジェンダーギャップ指数を埋め、女性の活躍を促すという観点から考えますと、身近に良いモデルがいることがとても大事です。

私自身、何人かの女性学長と親しくしていますし、アメリカの大学には女性学長が多いので、学長職というものを就任前、具体的にイメージしやすかったです。また、女性教授は学生時代に複数見ました。ああいう職業の選択があるんだ、とか、こういうことをしてみたら面白いかな、何か役に立っているのではないかな、という具体的な実例を若い時に見て、肌で実感するということは、本当に大事です。ですから、平和フェローが学内にいることは、女子学生には特に、とても刺激になっていると思います。



■ 国際基督教大学（ICU）前学長
日比谷潤子

1957年 東京生まれ。80年 上智大学外国語学部フランス語学科卒業。82年 同大学大学院外国語学研究所言語学専攻博士前期課程修了。88年 ベンシルベニア大学大学院アイツ・サイエンス研究科言語学博士。92年 慶応義塾大学国際センター助教授。2002年 国際基督教大学（ICU）教養学部准教授。04年 教授。12〜20年 学長。20年 聖心女子学院常務理事。日本学術会議会員。専門は社会言語学。編著書に『はじめて学ぶ社会言語学』ミネルヴァ書房、2012年など。

若者に可能性の翼を持つている ことを気付かせよう

もともと、ロータリーの平和フェローに選ばざれ、世界の各地で勉強をするためには、男女に限らず、かなりの実務経験が必要で、普通に勉強して卒業して、そして受験、という流れではなく、私が見てきたフェローは、人それぞれいろいろな機関にいた人がいますけれども、大学を卒業後、「私はこんな仕事をしてきた。だから今度はロータリーの平和フェローで修士号を取って、その先はこういうことをしたい」と具体的なことを願書に書いて入ってきます。

それと比べると、日本の大学には18歳クラス2〜3年ぐらいの人、そのぐらいの年齢層の人が圧倒的に多く固まっているのが現状で、実は、世界的に見ると結構珍しいことです。他国の大学はもつといろいろな年齢層の人がいます。成人の学習者は多いですし、働いてから大学に戻るという人も多く、入学2回目という人も非常に多い。

ところが、日本はなかなかそういう年齢構成にはなりません。そこへ、ロータリー平和フェローというのは一般の日本人の学生、大学院生に比べると、はるかに豊かな国際経験と職業経験を持って入ってくるわけです。そういう人たちがキャンパスにいて、各人の経験を話し、若者にシェアしてくれたり、その多様性に満ちた経験に基づき研究を進めたりしていくので、一般的な学生にとつては、平和フェローと一緒に授業に出るといことが、実に身近なロールモデルとして、大変に素晴らしい効果を上げていると私は思っています。

これからも、女性の活躍にとどまらず、世界で活躍するためのロールモデルとしての平和フェロー、という役割を大学としては重視しているの、平和センターが続けられるように、当学は頑張りたいと思っております。カウンセラーとして、またロータリアンとして、皆さまが厚くご支援くださっていること、サポートしてくださっていることが、このロータリー平和センターの発展に役に立っております。

そして、会員の皆さまはRIやICUのウェブサイトを活用され、このロータリー平和センターの活動に関心を持っていただくと同時に、何かご質問、ご意見などあればいつでもお寄せいただければと思います。

あともう一つ。実は日本人の平和フェローの学生が非常に少ないのです。これは日本社会の構造もあって、実務経験がどうしても必要という部分があるネットワークになると思います。私も人のことは言えません。自分もそうでしたから。高校と大学の間、大学と社会の間、何か違う時間を過ごす人は、非常に少ないですよ。例えば大学を卒業したら1年間、世界を放浪してくる、というようなことを日本人は、今でもあまりしません。もつと前の段階、高校卒業後、大学に入る前に何かするのが盛んな国も非常に多いのですが、それもあまり今の日本では……。

つまり、日本はそもそも実務経験を積む機会が少ない社会です。それも、私が先ほどお話ししたロールモデルということと関係があると思います。そういう人が若い時に身近にいて、大学を卒業した後の選択肢として大学院などに進学する、企業に入る、ということに併せて、もう一つ

第三の方向、何か実務経験を積もう、というような方向をオプションとして、若い人が考えやすいと思うのです。現状は、やっぱりどうしても考えが及ばないのかな、という感じがしています。そんなところに今、学生時代からのインターンシップというものが、非常に盛んになってきています。皆さまの会社も、多くの大学生をお世話なさっているかと思うのです。

平和フェローに限って言いますと、平和フェローのような道に進むためにプラスになるようなインターンシップとか、実務経験に早くから目を開き、最初は夏休みだけですとか、そういうものを積み上げていくのが、日本人の平和フェローを増やす理由としては良いと思っております。ぜひ、ご協力いただきたいと思います。

これから未来のある子どもたちに、可能性の翼を広げようということについて、具体的な言葉としては、平たく言うと、「なんでもやってみよう」というのがいいかもしれません。人は、ちょっと一歩踏み出すだけですごく変わると思います。翼を折られてしまうことも不幸にして多いと思うのですが、人に折られるだけではなくて、持っている翼を広げようとする人や、翼を持っていると気付いていない人もいると思うのです。

変な例かもしれませんが、ニワトリは飛ばないです。自分はニワトリだと思っても、実はハト、飛ばうと思えば飛べるロータリーのハトなのだ、というケースもあると思います。自分で自分の可能性を狭めてしまうことのないように、というメッセージを、人生の先輩として、若い人には伝えていただきたいと思います。

(ホスト 川崎マリンRC)